

稲生 秀俊

東京外国語大学 大学院博士前期課程

要旨

類義のイディオムの構文と構成的形式のいずれを使用するかを説明すべく、コーパスデータの定量的な分析を試みた。いずれも「死」のドメインに属する意味を持つ以下(1)~(3)を互換性のあるペアとして対象とした。(1) kick the bucket/die、(2) pushing up daisies/dead and buried、(3) sleep with the fishes/be killed。コーパス(COCA)からこれらを含む用例を抽出し、形式・意味・使用域等のタグ付けを行って集計した。その結果、イディオムの構文は、話者自身に関する非事実をカジュアルな場面で述べ、構成的形式は、第三者に関する既成の事実をフォーマルな場面で述べるのに使用される傾向があることがわかった。このような用法の差異から、イディオムの構文と構成的形式とは真理条件的意味は同一でも喚起される百科事典的知識の差があることが想定され、そこには字義の意味と慣習の意味との差が影響していることが考えられる。

1. はじめに

これまで認知言語学では、メタファー、フレーム意味論、構文文法、用法基盤モデル等の観点からイディオムに関連した研究が行われてきた (Lakoff and Johnson 1980, Fillmore 1977, Fillmore, Kay and O'Connor 1988, Taylor 2012 等)。中でも Fillmore, Kay and O'Connor (1988)は、イディオム *let alone* の詳細な分析を通じて文法と語彙の二元論では説明できないイディオムが言語研究における重要な対象であることを示し、イディオムに代表される形式と意味の対としての構文 (construction) を軸とする構文文法研究の扉を開いた。現在、構文文法で構文は次のとおり定義されている。

言語のパターンであって、その構成部分または存在することが認められている他の構文からその形式または機能を正確に予測することができないものは構文と認められる。さらに、完全に予測可能であっても十分な頻度で生じているものは構文として蓄えられている。(Goldberg 2006: 5、大谷 2019 を参考に筆者訳)

一般用語としてのイディオムには、全体の意味が構成的に理解できる慣用的な表現 (例、*jump to the conclusion, be on the defensive*) や、ことわざ (例、*An apple a day keeps the doctor away*) も含まれることがあるが、本稿においては全体の意味が構成要素の意味から導き出せないもののみをいう。すなわち、複数の語からなる構文であって構成要素である語彙項目から全体の意味を正確に導き出せないもの (例、*pull someone's leg* ‘からかう’) と定義する。これに対し、構成的形式とは個々の語彙項目から意味が導き出せる表現形式 (例、*tease someone* ‘からかう’) と定義する。構文文法における構文の定義には、構成的な形式であっても話者の言語知識として蓄えられているものも含む (Goldberg 2006: 5、前掲引用の後段) が、本稿では構文のうち非構成的なものを対象とする。

認知言語学のなかで重要な位置を占めるイディオムではあるが、管見の限りでは特定のドメインに属する複数の類義のイディオムの構文と構成的形式とを対照してそのいずれを選択するかの動機を明らかにした研究はみられない。その理由としては、以下が考えられる。まず、認知言語学および構文文法では、「意味と形式の一対一対応」（形式が異なれば意味も異なる）（Bolinger 1977: ix、山梨 2009: 22）という考え方が広く受け入れられており、大きく形式が異なる表現について同義ないし類義を前提とする研究には関心が向きにくい可能性がある。また、イディオムの用法には形態統語論や意味論に留まらず、文体、文脈や語用論的な要素が関係していると想定されるが、これら複合的な要素を包含した分析手法が確立していないことも挙げられよう。

本稿では、構成的形式（いわば「普通の言い方」）で言える内容をなぜ非構成的なイディオムの構文で言うのかという動機の解明の端緒といたく、類義のイディオムの構文と構成的形式のペアがどのように使い分けが行われているのかをコーパスデータの定量的な分析を通じて明らかにすることを試みた。イディオムの構文と構成的形式が全く同一の意味を持つことはないと考えているが、互換性のある文が想定できる程度には意味が重なるペアは存在しており、本稿はそのようなペアについて調査したものである。また、複合的な要因についてもコーパスデータを使用した定量的な調査によって一括して分析することができる可能性があると考えた。

2. 先行研究

Fillmore, Kay and O'Connor (1988)は、イディオムとは、文法と語彙の知識のみによっては、(i) その表現が可能であること、(ii) その意味、(iii) それが慣習的な表現であること、がわからない表現と定義した。言語を文法と語彙とに分ける伝統的な体系ではイディオムは文法と語彙のいずれにおいても例外とされているが、高い生産性や構成的性を持つものが多数あり、例外扱いでは言語能力の大きな部分を説明することができない。形態統語論・意味論・語用論のすべての情報を含んだ、句構造よりも大きなまとまりである「構文」を文法的な単位として提唱した。

Nunberg and Wasow (1994)は、イディオムを分析する際の基準として、意味の慣習性、用法の不透明性、（字義どおりの）意味の構成性の程度を挙げたうえで、これらの尺度は連続的であり、字義どおりの意味の構成性の程度を無視してイディオムをすべて非構成的と取り扱うべきでないと主張した。この主張は、認知言語学の諸研究に通底するプロトタイプ的カテゴリー観と整合的である。本稿では、意味の不透明性において典型的な構文をイディオムの構文として対象としたものである。

この他にもイディオムについては心理言語学（Gibbs 1980, 1990）や自然言語処理（Sag et al. 2002）などの立場からも多面的な研究がなされているが、前述のとおり管見の限りでは特定のドメインに属する複数の類義のイディオムの構文と構成的形式とを対照してその用法の差異を分析した研究はない。本稿では、認知言語学の枠組みを前提とし、機能的な観点からイディオムの構文と構成的形式を対比して特徴を明らかにしたい。

3. 調査

3.1 データ

対象とするイディオムは、Taylor (2012)、Gulland and Hinds-Howell (1994)、The Idioms: The Largest Idioms Dictionary (ウェブサイト) および Farlex (2023)から収集した。収集したイディオムの意味（構成的な形式による説明）について、これらの出典に加えて、必要に応じ辞書を参照した（Cambridge Dictionary, Longman Dictionary of Contemporary English, Merriam-Webster Dictionary, Oxford Advanced Learner’s Dictionary）。その中から、イディオムの意味の説明が文中において互換性のある類義の構成的形式となっていると判断されるものを選んだ（意味の説明は、多くの場合、説明的で実際の文において互換性のある形式とはなっていない）。言い換えると、イディオムとそれに意味が対応する構成的形式のペアが相互に入れ替え可能な文が想定できるものを調査対象として選定した。

具体的な調査対象は、以下(1)~(3)のいずれも「死」のドメインに属する類義のイディオムの構文と構成的形式のペアである。

- (1) kick the bucket/die (‘死ぬ’) (以下、KTB/D と略記する。以下同様。)
- (2) pushing up daisies/dead and buried (‘死んで墓に入っている’) (PUD/DAB)
- (3) sleep with the fishes/be killed (‘死んでいる’) (SWTF/BK)

次に、コーパス(COCA, Davies 2008-)からこれらのイディオムの構文および構成的形式それぞれを含む用例を抽出した（動詞を含むものはすべての活用形を対象にした。）。文体や文脈が判別できるよう、COCA ウェブサイトのコンコーダンス機能ではなく、ダウンロードされた COCA full-text data から自作の Python プログラムを使用して可能な限りパラグラフ単位で用例を切り出すようにした。得られた用例数が多いものについては、次項で記すように手作業でタグ付けをする関係上、ランダム抽出で用例数を絞った。

対象とするイディオムの構文と構成的形式とは、真理条件的意味を共有しているだけでなく、互換性のある場面も想定できることから、構文のネットワークで意味的な関連を持っていることが想定される（想定される構文ネットワークの例を図1に示す）。

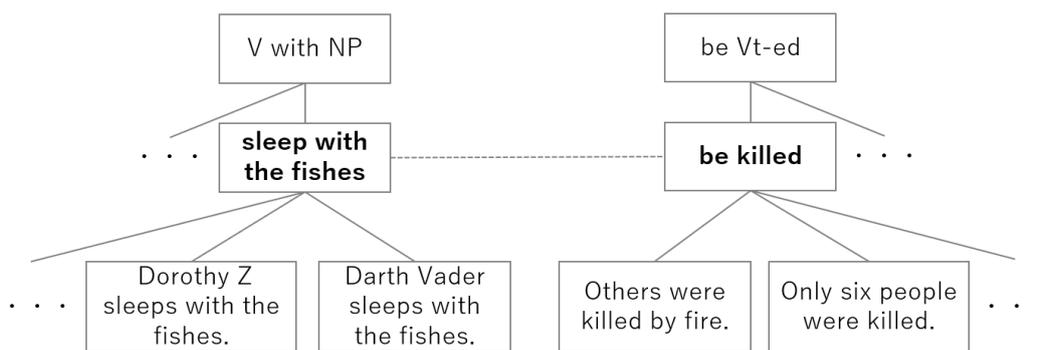


図1 仮定される構文ネットワークの例

図1において、縦方向の実線は継承リンクを示す。具体的な用例から共通部分であるイディオム（と構成的形式）が構文として記憶され、さらに、他の構文との共通性を抽出することで上位の構文が定着している可能性が考えられる。横方向の破線は、意味的な関連を示す。イディオムの構文と構成的

形式は、ともに主語のある状態を表すことで共通しており、文脈・文体によっては互換性があると考えられることから、関連付けて話者の構文ネットワークに記憶されていると想定される。

本稿では、イディオムは構文と呼ぶのに対し、構成的形式は構文とは呼んでいない。イディオムは意味と形式の対という構文文法における構文の定義に該当することが明らかであるが、構成的形式の場合、その形式と意味とが対として言語知識に蓄えられているかどうかは必ずしも明らかではないからである。すなわち、話者が持つ構文としての言語知識は、より抽象的な構文（図1でいえば *be Vt-ed*）であって、発話時にこの構文に語彙項目を組み合わせ形式が構成されている可能性がある（構文として蓄えられている可能性も排除しない。）。

3.2 分析方法

抽出したパラグラフから対象とするイディオムの構文または構成的形式を含む文について、形態統語論、意味論、語用論（ディスコース）、ジャンル（genre）の特徴を調べるため、表1に示す項目について手作業でタグ付けを行った。表1は、Gries (2010)を参考に項目を加除して機能的な分析という本稿の目的に沿って差異が見出される可能性のある項目を選定したものである。時制（tense）については、形態論的には英語に未来時制は存在しないが、本稿では機能的な分析を目的とするため、あえて未来（future）というタグを設定し *will* や *be going to* などの迂言的標識によって未来を表す用例を区別した。ジャンル（genre）は、COCAでデータが分類されているジャンルを踏襲した。

表1 用例の特徴タグ一覧表

Type of ID tag	ID tag	ID tag levels							
morphological	tense (VP)	past	present	future					
	mood (v)	indicative	subjunctive	imperative					
	aspect (v)	imperfective	perfective						
	voice (v)	active	passive						
	person (subj)	1	2	3					
	negation(S)	affirmative	negative						
syntactic	predicate/argument/adjunct	subject	predicate vp	direct object	indirect object	complement	adjunct		
	clause type (C)	main	subordinate						
semantic	types of nominal arguments (subj)	abstract	animate	inanimate					
	sense (S)	literal	figurative						
discoursal	register	frozen	formal	consultative	casual	intimate			
	mode	narrative	descriptive	expository	argument				
genre (COCA)		academic	blog	fiction	news	magazine	spoken	tv/movie	web

(Gries 2010を基に改変)

タグ付けを行ったデータを集計し、各イディオムの構文および構成的形式毎に特徴の該当する件数を集計した。そして、各項目についてペアの件数を比較しその多寡によって相対的な特徴を見出した。

4. 結果

3. の分析の結果、「死」ドメインの用例におけるイディオムの構文と構成的形式との相対的な特徴は

表2のとおりとなった。ここで特徴として示したものは、両形式の差異に着目して相対的な多寡を基準としており、必ずしも最頻値によるものではない。したがって、両形式に共通して高い頻度で見られたタグは示されていない。

表2 「死」ドメインの用例における相対的な特徴

	kick the bucket	die	pushing up daisies	dead and buried	sleep with the fishes	be killed
サンプル数	54	55	40	57	49	77
時制	未来	過去	未来	過去	現在	過去
アスペクト	非完了相	完了相	非完了相	完了相	非完了相	完了相
人称（主語）	1人称	3人称	1人称	3人称	1・2人称	3人称
有生性（主語）	－	－	有生	抽象、非有生	非有生	有生
意味	－	－	慣習的	修辭的	修辭的	字義通り
使用域	カジュアル	フォーマル	カジュアル	フォーマル	カジュアル	フォーマル
ジャンル	ブログ、雑誌	会話	ブログ、ニュース、ウェブ	フィクション、会話	テレビ・映画	ブログ、ニュース

(注) 1. 「－」は相対的な特徴がみられなかったことを示す。3ペアのいずれも相対的な特徴が見られなかった項目は表に記載していない。
 2. イディオムの「意味」で、「慣習的」とはイディオムとして慣習化した意味を指し、「修辭的」とは慣習化した意味がさらにメタファー等として用いられた意味をいう。

対象とした3ペア全体を通じて見られた特徴は次のとおりであった。

イディオムの構文は、未来・現在時制、非完了相、1人称、カジュアルな使用域に特徴がある
 構成的形式は、過去時制、完了相、3人称、フォーマルな使用域に特徴がある。

これらの特徴の要素を言語使用の場面に当てはめて解釈すると、イディオムの構文は、話者自身に関する非事実をカジュアルな場面で述べ、構成的形式は、第三者に関する既成の事実をフォーマルな場面で述べるのに使用される傾向があると言える。これらのペアは、「死んだ」状態を表すことでは真理条件的に共通性がある。そもそもこれらのペアの類義性と互換性は、狭義の意味論的な意味が等しいことに支えられている。しかし、上に見た用法の差は、話者による事態の捉え方の差異とそれぞれの捉え方によって喚起される百科事典的知識の違いが反映したものと考えられる。イディオムの構文は、死喩 (dead metaphor) と呼ばれ、元々隠喩であったものが頻繁に使われるうちに形式と意味とが直接結びついて記憶されるようになったものだと考えられることがある。しかし、ここで見られた用法の差異は、イディオムの構文が持つ字義的な意味と慣習的な意味との差異が独特の百科事典的含意を持っている可能性を示唆している。

これに対し、構成的形式は相対的に客観的・中立的な表現であり、百科事典的な含意は少ないと考えられる。「死」という人間にとって最も避けたいことを話者が自己について語る際に、直截な言い方を避けて字義的には死を意味しないイディオムの構文を婉曲的な形式として使用する動機となっている可能性が考えられる。かといってフォーマルな使用域ではこれらのイディオムの構文が持つニュアンスは逆に不適切であると感じられるため、構成的形式が用いられると考えられる。

5. 結論と今後の課題

イディオムはインフォーマルな使用域で使われる傾向があると言われることがあるが、全体としてそれを実証的に示すことができたと考える。それに加えて、「死」ドメインのイディオムは、1人称、非事実について使われる傾向があることがわかった。このような用法の差異から、イディオムの構文と構成的形式とでは喚起される百科事典的知識の差があることが想定され、そこには字義的意義と慣習的意義との差が影響していることが考えられる。

今後の課題としては、本稿では分析対象としたペアやそれらが属するドメインが限定的であるため、イディオムの構文と構成的形式の認知的な差異の一般化には限界があった。より広範なデータの分析を通じた一般化の可能性とそのための方法論（例えば、深層学習による分散モデル等による分析の自動化）の探求が今後の課題として挙げられる。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. London/New York: Longman.
- Fillmore, Charles J. (1977) Topics in lexical semantics. In Cole, Roger W. (ed.) *Current Issues in Linguistic Theory*. Indiana: Indiana University Press. pp. 76–138.
- Fillmore, Charles, Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor (1988) Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of LET ALONE. *Language* 64: 501-538.
- Gibbs, Raymond W. Jr. (1980) Spilling the beans on understanding and memory for idioms in conversation. *Memory & Cognition* 8(2): 149-156.
- Gibbs, Raymond W. Jr. (1990) Psycholinguistic studies on the conceptual basis of idiomaticity. *Cognitive Linguistics* 1(4): 417-451.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work*. Oxford: Oxford University Press.
- Gries, Stefan Th. (2010) Behavioral profiles: A fine-grained and quantitative approach in corpus-based lexical semantics. *The Mental Lexicon* 5(3): 323-346.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986) 『レトリックと人生』東京：大修館書店)
- 大谷直輝 (2019) 『ベーシック英語構文文法』東京：ひつじ書房.
- Sag, Ivan A., Timothy Baldwin, Francis Bond, Ann Copestake, and Dan Flickinger (2002) Multiword Expressions: A Pain in the Neck for NLP. *Computational Linguistics and Intelligent Text Processing* 1–15.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. Oxford: Oxford University Press.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論：文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店.

コーパス・辞書

Cambridge Dictionary. Cambridge University Press & Assessment. <https://dictionary.cambridge.org/> (2023年9月20日閲覧)

- Davies, Mark (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Farlex Inc. (2023) *The Free Dictionary*. <https://www.thefreedictionary.com/> (2023年9月20日閱覽)
- Gulland, Daphne M. and David Hinds-Howell (1994) *The Penguin Dictionary of English Idioms Second Edition*. *Longman Dictionary of Contemporary English Online*. <https://www.ldoceonline.com/> (2023年9月20日閱覽)
- Merriam-Webster Dictionary*. Pearson Education Limited. <https://www.merriam-webster.com/> (2023年9月20日閱覽)
- Oxford Learner's Dictionary*. Oxford University Press. <https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/> (2023年9月20日閱覽)
- The Idioms: The Largest Idioms Dictionary*. <https://www.theidioms.com/> (author not indicated) (2021年5月25日閱覽)